

「いらいらして殺った。誰でもよかつた！」
そんな事件が後を絶たない。「死にたかつた」といいながら、自分の命は絶たずに、何の罪もない他人を傷つける。殉教テロでも政治テロでもない、遺恨も打算も確たる憎悪もない。アメリカのように手軽に銃でも手に入れば、とんでもない事態になるのだろう。しかし、日本でも火薬やガソリンは簡単に手に入ることを考えると、長時間、密室環境にある新幹線は格好の標的だ。

日本では空港を除けば、公共交通機関に特段のセキュリティはない。

では、海外はどうだろう。ロスの地下鉄では、この秋にもボデイスキャナーが設置される。銃器や爆発物も検知でき、1時間に2000人の検査が可能だという。ニューヨークのグラントセントラル駅では、迷彩服、自動小銃、警備犬は、あたりまえの光景だ。アメリカより切迫しているのがヨーロッパで、ユーロスターやタリスのように、国をまたぐ高速鉄道のターミナル駅では、X線検査は欠かせない。その先を行く中国では、北京や上海はもちろん、地方都市の地下鉄にまで手荷物検査が運用されている。多くは公表されていないが、銃器や弾薬の摘発もされており、刃物の類の没収は珍しいそう。

主要駅は公安関係者だらけで、物々しい警備がある意味、功を奏している。そのニヒルな視線を隠すサングラスには、なんと通行人の顔認証まで可能にしている。今や、物々しい人海戦術とAIセキュリティは、

共同作戦 —人工知能と動物力—

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

海外の安全常識だ。

当然のことながら、海外の嚴重な警備は、殉教や政治テロ、プロ組織や作業員を標的にしたものだが、実のところ今、日本で起こっている自分勝手な事件の担い手は、サイコパス個人である。情けないやら、ある意味、治安のよさにほっとするやら、複雑な気分だ。2015年の新幹線車内放火殺人の後、車輛の9割に監視カメラが設置され、在来線でもそれは加速している。

また、今年起きた痛ましい刺殺事件を受け、年内には防護盾と刺股が完備される。20年前、「監視社会は逆効果！」と監視カメラに牙をむくりベラルが沢山いたが、今や、犯人特定、検挙の命綱ではないか！

サイコパスの残忍な気まぐれを嘆くだけでは、また悲劇が繰り返される。

そして、日本には、オウム事件というおぞましい教訓と反省がある。

大袈裟に、物々しく、最悪を想定して設備投資をすることが、後悔をしないための準備である。画像解析、ソーシャルデータを駆使したAIセキュリティと、目に見える物々しい抑止力こそ、安全のための車の輪だ。

AIの目と耳を補うのが、訓練された人間であり、AIが嗅げない危険な匂いを、警備犬（火薬探知）が見つけ出す。

悪党を駆逐するには、人工知能と動物力の共同作戦しかない。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中